

日本・韓国・中国の強化体制による 各国のダブルスの戦型の特徴について

—第13回 日・韓・中ジュニア交流競技北海道大会から—

About the Characteristic of The Round Type of The double of
Each Country by the Reinforcement System of Japan/Korea/China
—From The 13th Youth Friendship Match of Japan / Korea /China in Sapporo—

北 村 優 明 竹 田 唯 史 小 島 一 夫
KITAMURA, Masaaki TAKEDA, Tadasi KOJIMA, Kazuo

1. はじめに

バドミントン競技は1893年に英国において「ザ・バドミントン・アソシエーション」が創立され、ルールが確立された。その後1899年に第1回全英選手権が開催され、1934年国際バドミントン連盟（IBF）の設立を経て、急速に普及していき、1992年バルセロナ・オリンピック大会に正式種目となった。さらに2006年、「バドミントン・ワールド・フェデレーション（BWF）」と改名した。そして、現在ジュニア大会からシニア大会まですべての世代で多くの競技者参加による全国大会・国際大会が盛んに開催されており、生涯スポーツ競技として親しまれている。

筆者らは平成16年～20年度文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」（「学術フロンティア推進事業」）における「北方圏における生涯スポーツ社会の構築における総合的研究」プロジェクトの競技者育成研究分野において北海道体育協会並びに北海道バドミントン協会と共同研究を図り、バドミントン競技における「トップアスリート育成の指導システムの構築に関する実践的な研究」として、競技者・指導者育成に関する指導プログラム完成し、競技力向上に向けてスポーツ振興を図るための研究を進めてきている⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

このようなバドミントン競技の研究に関しては、ナショナルチームメンバーの生化学検査をしたものや⁴⁾、プレーヤーの動作軌道を明らかにしたもの¹⁾、そして運動特性を生かしたコート内トレーニング法を提言したもの³⁾などがある。ゲーム分析に関するもの²⁾⁸⁾⁹⁾として、古川ら（2004）のものがあるが、BWFのルール改正（2006）にり、ラリーポイント制になったことでさらにバドミントン競技におけるゲーム分析の研究の必要性がでてきたと考える。

そこで本研究は、日本・韓国・中国の三カ国におけるナショナルジュニア選手による友好試合（2005年 札幌）の得点パターンを分析しながら、日本・韓国・中国の強化体制による各国の戦型の特徴について各国の選手育成の背景と強化システムを踏まえて分析することを研究目的とした。また本研究は「北方圏生涯スポーツ研究センター」の研究プロジェクト・競技者育

成研究の目的でもある北海道のジュニア強化指定選手育成に資するものとする。

2. 研究方法

対象は、平成17年8月23日～29日に札幌市において実施された第13回日・韓・中ジュニア交流競技会北海道大会において、各国のジュニアナショナルチームの代表で構成される男・女ダブルスの「日本対韓国」、「日本対中国」、「韓国対中国」対戦の6試合の中から各1ゲームずつ抽出した。そして、それぞれの試合をコート両側後方上部よりデジタルビデオカメラにて撮影し、映像分析ソフト「DARTFISH TEAM PRO」(ダートフィッシュジャパン社)を使用し、撮影した画像を取り込み、バドミントン世界連盟(BWF)使用の結果表への転記・集計と日本バドミントン協会公認スコアシートを使用して分析をした。

また、各国の選手育成の背景と強化システムについては、来日した両国のコーチと日本バドミントン協会選手協会員へのインタビューを実施した。

大会結果は次の通りである。

男子

	日本	韓国	中国	北海道	順位
日本		(S 0-3) (W 0-2)	(S 0-3) (W 1-1)	(S 2-1) (W 2-0)	3
韓国	(S 3-0) (W 2-0)		(S 1-2) (W 1-1)	(S 3-0) (W 2-0)	2
中国	(S 3-0) (W 1-1)	(S 2-1) (W 1-1)		(S 3-0) (W 2-0)	1
北海道	(S 1-2) (W 0-2)	(S 0-3) (W 0-2)	(S 0-3) (W 0-2)		4

女子

	日本	韓国	中国	北海道	順位
日本		(S 0-3) (W 0-2)	(S 0-3) (W 0-2)	(S 3-0) (W 2-0)	3
韓国	(S 3-0) (W 2-0)		(S 0-3) (W 0-2)	(S 3-0) (W 2-0)	2
中国	(S 3-0) (W 2-0)	(S 3-0) (W 2-0)		(S 3-0) (W 2-0)	1
北海道	(S 0-3) (W 0-2)	(S 0-3) (W 0-2)	(S 0-3) (W 0-2)		4

・分析

スコアシートからこの試合はゲームのはじめで日本ペアは最初のサービスをミスしてからあつという間に9本までいかれ、4回のサービス権を得たが1点しか取れず、その後、15本まで一気に押し切られた。2ゲーム目も4本しか取れなかった。

結果表から、1ゲームの試合時間が9分45秒、平均ストローク7.4本というのは、ある意味記録的タイムで、一方的なゲーム展開であったことが分かる。当然中国ペアのウイニングショット特にスマッシュの数が特出している。反対にミスの数においては日本ペアのサービスレシーブが露呈している。5本しか打てなかったサービスで1回ミスし、レシーブミスを2回もしている。またショットの球種においてスマッシュの数では勝っているのに、点数に結びついていないということは日本ペアの攻撃力の弱さと中国ペアのレシーブの強さに関係してくる。試合の展開からも中国ペアにスマッシュを打たされているとしか思えない。そして、中国ペアのレシーブからの切り返しによって一気に決められている。

ビデオの画像からは次のように見てとれる。中国ペアはカット・スマッシュで相手を揺さぶり、確実にネット前のプッシュ・スマッシュで得点をあげている。また日本ペアサイドに対し、スマッシュを打ちながら両サイドに相手を揺さぶり、ミスを誘発させていた。さらにサービスレシーブに対しても、ネット前に鋭くプッシュをし、速攻に繋げている。ネット前での相手にかかるプレッシャーが強く、ネットストップも効果があり、日本ペアのミスを誘っていた。圧倒的な攻撃でゲームを先取した。

(2) 日本対中国戦(女子)の分析

・分析

スコアシートから。前半は点数は入らずサービスオーバーを6回繰り返すが、7回目に韓国ペアが均衡を破りいっきに13本連取する。その後日本ペアは2点を入れるが押し切られる。ゲーム初盤での競った場面で韓国ペアは流れをつかんだ。

結果表から、ゲーム時間9分45秒は女子ダブルスとしては短く、平均ラリー数も7.4本と少なめである。このことから実力に相当差の開きがあることが明らかである。ウイニングショットでもスマッシュで決められる数が3倍強あり、日本ペアのレシーブの弱さが明白である。またバックアウトも目立つ。注目すべきは韓国ペアにロングサービスが多いことである。女子のダブルスにおいてはロングサービスがかなり有効であることを韓国ペアは熟知しているであろう。ショットの吸収でスマッシュの数は中国戦同様、韓国戦においてもほぼ同等程度であったが、硬いレシーブによって切り返され、相手のエースを呼んでしまった。

ビデオの画像からは次のように見てとれる。日本はサービスレシーブであげさせられ、打ち込まれるパターンが前半目立つ。中盤日本が攻撃していてもドライブで切り替えされ守勢へと追い込まれていた。また、韓国は簡単に上げず、終始攻撃に徹していた。ネット前の奪取が速く、前衛で決めるパターンが多く、ネット前のプレッシャーが強力で相手のミスを誘発していたのが、印象的であった。

・分析

ゲーム序盤、互いに鋭いサービス・プッシュの攻め合いで若干のサービスオーバーを繰り返すが、中国ペアが徐々にリズムをつかみ7-1とリード、その後、お互い拮抗したラリーの応酬で点数を取り合うが前半の差が縮まらず、中国ペアが勝利する。

結果表から、ゲーム時間15分6秒、平均ラリー数7.8本とこのレベルの女子ダブルとしては平均的な試合をしているといえる。ウイニングショットからみれば攻撃力は互角だがレシーブ力のネット際の攻めに差がある。中国ペアの攻めを恐れるがゆえに、攻める体制を速く作ろうとした韓国ペアにネットミスが多発している。ショットの球種では中国ペアのスマッシュの数が韓国ペアの2倍強あるのに、加点は双方3点と同じであることから韓国ペアがドライブ戦でネットに詰め、効率よくスマッシュを決定打にしている。一方中国ペアはスマッシュで固い韓国ペアの守りを崩し、ネット際のディセプションによって加点している。

ビデオの画像からは次のように見てとれる。中国ペアはセンターへのドロップ・両サイドへの大きなロブで相手を揺さぶり、緩急をつけながら力強い攻撃をしている。メリハリのある攻めが相手を苦しめ、ミスが多発させ、韓国ペアのペースをつかませることなくこのゲームを終了させた。圧倒的な攻撃力とコース左右への力強いロブが目立った試合であった。

(4) 日本対中国（男子）の分析

・分析

このゲームはファイナルゲームになった2ゲーム目である。ゲーム序盤の競り合い（3-3）の中から日本ペアが5本連取した。ここで中国ペアの焦り、無理な攻撃でミスを重ねリズムをつかめないうままゲームを終了した。

結果表からゲーム時間は17分08秒、平均ラリー数8.18本、ウイニングショットで12本と圧倒的に中国ペアのスマッシュが多いが、ポイントに結びついていないのは日本ペアがサービスを持っているものだからだ。これは中国ペアのサービスに問題があるようである。現にサービスミスも日本ペアより多い。日本ペアもロングサービスを比較的対応しているため2球目を打ち抜かれている。このゲームを見る限り、中国ペアは完成度の低い攻撃型と言えよう。日本ペアはオールラウンドな攻守混合型といえよう。

ビデオの画像からは次のように見てとれる。1ゲームを取り安心した中国ペアに対し、日本ペアはレシーブを中心としたコンビネーションの良さで序盤を抜け出し、中国ペアの焦りを誘い、ミスを乱発させたことが勝因である。中国ペアは身体能力を活かしての攻撃力はあるがまだ荒削りで才能だけでやっているようにみえた。

・分析

このゲームはセカンドで、ゲームの序盤日本ペアは2点リードするが(4-2)中盤で(4-9)と韓国ペアに7本連取される。その後、韓国ペアに3回のリードを許すがいずれも追いつき14本のセティングに至る。しかしこれを3本連取されて逆転負けをする。

結果表からゲームの時間数13分01秒、平均ラリー数5.56回、点数の上では競っているように見えるが、雑なゲームであると言える。

ビデオの画像からは次のように見てとれる。前半互いにドライブ戦の攻防を繰り返し、スマッシュアンドネットの攻撃がさえていた。しかしながら、韓国ペアのペースに持ち込み相手ペースに持ち込みながら、4-9と逆転する。10-10となるが韓国ペアのネット前のドロップを多用した緩急の攻めから、一気にマッチポイントまでいく。日本ペアはサーミスレシーブの駆け引きからネットプレイがさえ、セティングに持ち込むが日本ペアはサービスミスで2度行い、チャンスを逃し、振り切られた。

(6) 韓国対中国(男子)の分析

・分析

このゲームは3ゲーム目で、2ゲームを奪取した中国ペアが前半(9-5)リードし、中盤でも(12-9)リードするが攻守バランスの取れた韓国ペアがそのビハインドを跳ね返し逆転勝利する。

結果表から、ゲーム時間22分05秒、平均ストローク数9.45本、総ショット数476本は今大会では最も競ったゲームのひとつとなった。ウイニングショットの数を見てもほぼ同数で、若干勝った韓国ペアが勝っている。ミスの数においても若干ではあるが中国ペアのほうが多い。ショットの球種においてもほぼ同数である。接戦の中で中国ペアのスマッシュでの攻めを韓国ペアがレシーブで凌いでラリーの主導権を取っていったことがうかがえる。

ビデオの画像からは次のように見てとれる。互いにスピードのあるドライブ戦から上げないラリーに徹していたが、やや前半中国ペアの力みが目立った。韓国ペアの攻撃に対し中国ペアのミスを連発し、8-5でチェンジエンドするも、韓国ペアの疲れが目立ち始め、相手を突き放すことができず、中国ペアの追い上げを許す。しかしながら、終盤中国ペアのアタックミスが目立ち始め、韓国ペアのレシーブが勝っていたのが印象的だった。

4. 考察

各国の戦型について次のようにまとめることができよう。

	中国	韓国	日本
男子	典型的攻撃型	攻撃的混合型	混合型
女子	攻撃型	守勢的混合型	攻撃的混合型

無作為で抽出をしたが、国別の戦型分析において量的な問題は否めない。しかし各国のジュニア代表であることからおよその型は識別できると考える。

次に、上記のような選手が育成される各国の環境について考察する。

(1) 中国における戦型と強化体制

中国におけるバドミントンはメジャーで選手の育成については国家プロジェクトと言えるであろう。選手は9歳ころをめぐりにスペシャリストへの岐路に立つ。選ばれた児童は親元を離れ、優れていると判断されたものは市のチームに、さらに優れていると判断された児童は省のチームに公務員として入る。そして13ある省の中で秀でた才能があると判断された選手と国内大会の結果からナショナル・ユースチームが選ばれる。さらに4年に一度ある国体の結果とナショナル・ユースチームの中から男女合わせて60名前後のナショナル・チームが選ばれる。現在は北京オリンピックのため多少の増がある。前述した機構・構成のなかで、各レベルに即したトレーニングメニューがあり、日々の厳しい練習（生存競争）に耐えて世界の頂点を狙い、殆どの選手たちは25～27歳で選手生活を終える。（ラリーポイント制への移行で選手寿命が延びている。）ナショナルチーム（北京）に入ると超高級公務員としてステータスを得る。各大会で得た賞金は全て選手に与えられる。また国際大会とりわけ、オリンピックとアジア大会の結果に応じた破格の賞金と年金制度も確立されている。このような特出した環境と裾野の広い競技人口から、身体能力の優れた選手が生まれにくいわけではない。コーチの職においても基本的には公務員であり、上級を目指す場合には厳しい試験に合格するか上級に進める選手を育てなければならない。また優れた競技実績を残した選手には例外の待遇がある。しかし、多くの選手はコーチとして海外へ出て行っているのが現状でもある。

以上の恵まれた環境で育った殆どの中国選手のプレースタイルはその身体能力をいかした攻撃型といえる。戦術的にこのレベルではサービスから相手の四隅に丹念に配球し、単純なヘアピンを避け2名が平行に攻撃できる戦法をとっているのが読みとれる。

特にサービス、レシーブのミスの少なさには目を見張るものがある。これには、正規の練習が終わってからのフリータイムを利用しての地味ではあるが勝つ（生き残る）ために丹念にくり返されている意志を持った練習の賜物である。そしてトップ選手になると本人だけの間の取り方（ルーチング）を身につけているのも画一化した練習から一歩進んだオリジナリティーが見られる。

(2) 韓国における戦型と強化体制

韓国はかつて日本にその強化法を学んだ国だが、ソウルオリンピック頃から勢力が逆転し、今や日本は歯が立たない状態である。バルセロナ以降4大会で金・5、銀・4、銅・4と輝かしい結果を残している。その背景にある強化策として以下のようなことが挙げられよう。

- ・ 協会が政府・企業に働きかけ莫大な強化費を捻出している。
- ・ 儒教の国民性を背景に少数精鋭の徹底した強化を行っている。
- ・ 各コーチは協会と所属企業から給料を貰っている。
- ・ 選手の選出は協会が決める。
- ・ 賞金・年金制度がきちんと整っている。
- ・ 能力のあるジュニアの発掘に協会が力を注いでいる。(奨学金・用具の無償貸与他)

日本・中国に比べて競技人口は極端に少ないが欠点として挙げられるが、オリンピックでメダル獲得等の実績をもたらしたスーパーサーキットトレーニング等を盛り込んだ強化マニュアルがあるため着実な強化をしている。

そんな強化背景から、韓国選手の3球目までのミスは中国と同様に少なく、前述した環境の中でしっかりとした基礎ができていることが伺える。また3球目以降のラリーから強靱な精神力と持久性の高い身体能力備え守備型と評価されてきた、配球パターンを追っていくと、ドライブ戦の早いタッチからのセンター攻撃を多用しエースに持ち込んでいる。又上位相手にはロブやクリヤーを使い堅いデフェンスからのカウンター攻撃方法もみられる。これらを総合すると攻守のバランスの取れた混合（オールラウンド）型といえる。

最も日本が見習わなくてはならない戦型ともいえる

(3) 日本における戦型と強化体制

日本は今、バドミントンに限らず選手育成の環境に変化が起きている。それは長きに渡り日本の競技スポーツを支えてきた学校体育の衰退にある。原因には高度経済成長がもたらした物理的生活の豊かさと核家族化や少子化といった要因、さらには「ゆとり教育」を象徴とした教育体制の変化から部活動に情熱を持つ教員の極端な減少等が挙げられる。一方、クラブチームを活動母体とする2世選手の台頭も目立つ。

日本の選手に見られる3球目までのミスは前述した環境からくる精神的な弱さ（あがり、プレッシャー、甘え等）によるものと推察される。また、3球目以降のラリーからも日本は攻守のバランスがとれた選手育成が評価されてきたが、終盤の決定力不足が指摘されていた。ネット・ハーフ・ドライブと攻撃チャンスを作りながらもエースに至らず、韓国には繋がれ、中国には切り返しのカウンターでミスを誘発された。このことから3球目までのショットの甘さが敗戦に繋がっていると言えよう。戦型においては中国の攻撃型と韓国のオ混合（オールラウンド型）の中間型といえるが、全ての面で中途半端でもあるといえる。

(4) 今後の北海道指定選手への強化対策と課題について

最後に、今後の北海道指定選手への強化対策と課題について下記のような提案をする。

新ルールにおけるラリーポイント制の導入によりサービス、レシーブ、3球目までがゲームの勝敗に大きく作用してくるようになってきたと言える。また中国、韓国のゲーム後半からのラリーの展開や平均ストロークの数から言っても体力と技術の差は歴然としたものがある。つまり国際試合で勝つためには早いうちにゲームの主導権をとらなければならない。よって、いわゆる出会いがしらの3球目までのショットの強化が北海道指定強化選手への指導として急務とされる。その方法として、筆者たちは次のようなプロセスが想定した。

- ① サービス、レシーブを含めた強化方法モデルの作成。
 - ② サービスの心構えと戦略的意義について指導者を含めた理解と認識を図る。
(例) 精神的に優位に立つための方法、女子におけるロングサービスの有効性について
相手のレシーブエースはこちらのサービスミスである等。
 - ③ レシーブの心構えと戦略的意義について指導者を含めた理解と認識を図る。
 - ④ 練習時間内・外におけるサービス、レシーブの練習時間の確保と指導。
 - ⑤ メンタル、フィジカル、テクニカルの総合的なトレーニングの実践。
 - ⑥ 上記の練習効果の確認のためのゲーム分析。
 - ⑦ より実践的な訓練、国際感覚の習得、モチベーションの高揚のために北海道強化指定選手の海外遠征・海外交流を定期的実施する。
- * より具体的な指導方法論については次回の研究論文で発表することにした。

付 記

本研究は平成16年～20年度文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」(「学術フロンティア推進事業」)の助成をうけて実施した。

参考・引用文献

- 1) 福島健介、西原明法「テンプレートマッチングを用いたリアルタイム選手追跡システムの開発とバドミントンシングルゲーム分析」、『電子情報通信学会技術研究報告』、第103巻143号、(社)電子情報通信学会、91～96頁、2003年。
- 2) 古川暁也、西山哲也、他「バドミントン試合中のストローク記録によるゲーム分析法」、『日本体育大学体育研究所雑誌』、第29巻2号、153～168頁、2004年。
- 3) 広田彰、他「運動の特性を生かしたバドミントン競技のコート内トレーニング法について」、『宮崎大学教育学部紀要』、宮崎大学教育学部編、101～107頁、1993年。
- 4) 泉圭祐、高橋勝美、他「高校バドミントン競技選手のゲーム中における運動強度」、『運動とスポーツの科学』、全国保健体育研究会、6(1)、13～18頁、2000年。
- 5) 北村優明、竹田唯史「バドミントンにおける日本・韓国・中国のジュニア選手の戦術・得点パターンの比較分析」、日本体育学会第57回大会、弘前市、2006年8月。
- 6) 北村優明、竹田唯史「バドミントンにおける日本・韓国・中国のジュニア選手の戦術・得点パターンの比較分析(第2報—男子ダブルスの分析—)」、第46回北海道体育学会、札

幌、2006年11月。

- 7) 北村優明、竹田唯史「バドミントン競技における日本・韓国・中国のジュニア選手の戦術・得点パターンの分析」－男子ダブルスの分析－、浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要、第7号39～44頁、2007年
- 8) 鯨吉夫「バドミントン競技におけるゲーム分析」、『九州歯科大学進学課程研究紀要』、九州歯科大学進学課程編、15～33頁、1988年。
- 9) 関根義男「バドミントンのゲーム分析」、『日本体育大学紀要』、日本体育大学編集紀要委員会編、第17巻1号、55～62頁、1987年。